

駅前広場の利活用に向けた行動変容ステージの進展に関する研究

日大生産工(院) ○小田部 匠
日大生産工 永村 景子

1. はじめに

近年、地方での少子高齢化や人口減少が深刻化している中で、地方都市では主要鉄道駅における駅周辺整備事業が進められている。特に、駅前広場は、都市の玄関口であり、地域交通の結節点の要であると同時に、地域住民の交流の場でもあるため、今後多様かつ重要な役割が期待されている。しかし、整備完了後では一過性のイベントが多く、持続的な活用につながっていない。また、駅前広場の魅力が市民に認識されておらず、整備された公共空間が十分に利活用されていないケースも少なくない。

本研究の対象地であるJR柳ヶ浦駅(大分県宇佐市)は市の玄関口として、駅のリニューアルおよび駅前広場新設から成る公共空間整備が進められてきた。また、市民ワークショップやモノづくりワークショップを通じて、市民参画の場を設けてきた。しかし、公共空間整備に携わる市民は一部に留まっているのが現状である。

本研究では、地域の公共空間としての駅前広場の可能性を最大限に引き出し、駅前広場における利活用の促進を目的とし、市民の行動変容プロセスに着目した研究を行う。そこで、プロチャスカの行動変容ステージモデル(以下、行動変容ステージ、図1)に着目した¹⁾。人が行動を変えるには「無関心期」「関心期」「準備期」「実行期」「維持期」の5つのステージを通ると考えられており、ステージを進めるには、現段階での自分のステージを把握し、それぞれのステージに合わせた働きかけが必要になる。その中でも、市民や駅利用者における「無関心期」から「関心期」への進展が駅前広場の利活用促進に効果的であると考えた。そのため本研究では、現状の市民参画ステージを把握し、行動プロセスを明らかにする。



写真1: 駅前広場の様子



写真2: 待合室の様子

2. 研究対象事業の概要

宇佐市の玄関口であるJR柳ヶ浦駅は、柳ヶ浦高校の学生等の通学・通勤に利用されていたが、駅前ロータリーは列車の到着に合わせて送迎車や歩行者、自転車が錯綜していた。さらに、駅舎も老朽化していることからリニューアルを求める声が多く寄せられていた。そこで、宇佐市では、「“安全に集い・安心して憩い・地域を想う” まちの結び目の創出」をコンセプトに、基本計画を2016(平成28)年度に策定、2018(平成30)年度からJR柳ヶ浦駅周辺整備事業の取組みを始めた²⁾。2021(令和3)年度からは駅前整備に着手し、JR柳ヶ浦駅周辺整備事業の最終工事となる駅前広場(憩いの広場、公共交通ロータリー等)の整備が進められた(写真1, 写真2)。2024(令和6)年3月23日には整備事業の完了を記念して、「JR柳ヶ浦駅リニューアル記念イベント(以下、記念イベント)」を開催した。また、ハード整備のみならず基本構想策定当初から、活動性の高い拠点の創出を目指し、地域住民や地元の児童・生徒を対象とした市民参画の機会を設けてきた。

3. アンケート調査

本研究では、現状の市民の行動変容ステージを把握するため、駅利用者や市民を対象にアンケート調査を実施する。駅前広場工事中の「中間評価アンケート」、竣工直後の「経過評価アンケート」、竣工後数か月が経過した「事後評価アンケート」の3種類のアンケート調査を実施するが、本稿は「中間評価」および「経過評価」について述べる。

(1) アンケート概要

JR柳ヶ浦駅にて、駅利用者や市民を対象に参画実績や参画意識に関するアンケート調査を実施した。なお本アンケート調査は、宇佐市のJR柳ヶ浦駅周辺整備事業評価の一環として、宇佐市都市計画課と協働したものである。中間評価アンケート(以下、中間評価)の内容は、駅利用状況や駅舎改修・駅前広場整備に関する印象・ニーズ、まちづくり参加状況等、選択式9問および自由記述1問の計10問で構成した。フォローアップとして実施した経過評価アンケート(以下、経過評価)では、中間評価の項目に今後

無関心期



関心期



準備期



実行期



維持期

図1: 行動変容ステージモデル

Research on the Progress of Behavior Change for the Use of Station Squares.

Takumi KOTABE and Keiko NAGAMURA

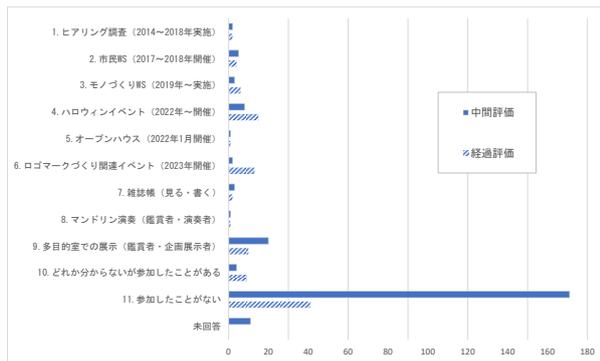


図2：今までに参加したことがある取組み

の取組みへの参加意欲等の質問を加えた選択式11問および自由記述1問の計12問で構成した。

(2) 実施計画

中間評価の実施にあたって、1日辺りの平均乗降客数1,091人に対し、一定の精度を確保することとし、信頼度90%、許容誤差5%、回答率50%と設定し、必要サンプル数は213票以上とした。対面でアンケート用紙を配布・回収し、帰省や観光客を見込んだ2023年8月10日9時～18時と、日常的な通勤・通学客を見込んだ2023年9月22日9時～17時の2日間で、計218件の回答を得た。また、経過評価は記念イベントが開催された2024年3月23日に対面でアンケート用紙を配布・回収し、イベント参加者を対象に計76件の回答を得た。

(3) アンケート結果・考察

本章では、紙面の都合上「JR柳ヶ浦駅・駅前広場に関連して開催された取組みやイベントへの参加・来訪経験(以下、設問①)」および「JR柳ヶ浦駅周辺でのまちづくりに対する意識(以下、設問②)」のみを示す。

a) まちづくりへの参加経験

中間評価と経過評価での設問①の集計結果をまとめたものを図2に示す。図2をみると、「11.いずれも参加したことがない」と回答した人が中間評価では171名、経過評価では41名と各評価の項目で最も多く、これまでの取組みへやイベントには、不参加であった回答が多いことが分かる。以上より、現状の行動変容ステージは、「無関心期」に該当する人が多いといえる。

b) まちづくりへの参加意欲

図3は今後のまちづくりに対する意識について、設問②の回答結果を設問①の回答結果とクロス集計したものである。設問②の選択肢である「5.見守っていききたい」および「4.思いはあるが何をしようか分からない」の行動変容ステージは「無関心期」に相当する選択肢を設定した。同様に、「3.お手伝いを通じてまちづくりに参加したい」は「関心期」、「2.趣味・特技を活かしたい」および「1.企画・運

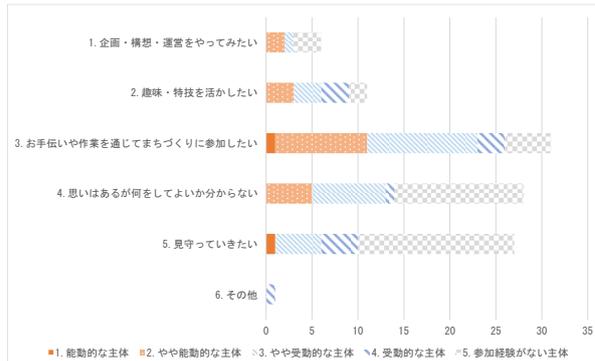


図3：今後、機会があれば参加してみたい取組み

営をやってみよう」は「準備期」に対応させた。なお、設問①の回答者を継続性・簡易性の観点から、「1.能動的な主体」「2.やや能動的な主体」「3.やや受動的な主体」「4.受動的な主体」「5.参加経験がない主体」の5段階に分類した。図3をみると、「5.見守っていききたい」および「4.思いはあるが何をしようか分からない」という回答した人は参加経験がない主体が多いことが分かる。一方、「3.お手伝いを通じてまちづくりに参加したい」または「2.趣味・特技を活かしたい」と回答した人は参加経験のない主体が全体の2割に満たず、行動変容ステージには参加経験の有無が関係しているといえる。また、「無関心期」に相当する項目と「関心期」に相当する項目の間には能動的な主体の数に差があり、「無関心期」の中でも主体の分類に差があることが分かる。以上より、既存の行動変容ステージモデルの「無関心期」や「関心期」の枠組みでは捉えられない主体が存在しており、「無関心期」と「関心期」の間に新たな行動変容ステージの可能性はないかと考えた。

4. 結論および今後の展望

本研究では、アンケート調査により現状の市民の行動変容ステージを把握・分析し、「無関心期」や「関心期」の中の主体の違いが示唆できた。発表時には、事後評価アンケートも踏まえ、新たな行動変容ステージの可能性について述べる。

謝辞：本研究を進めるに当たり、大分県宇佐市役所都市計画課の皆様、合同会社アトリエ T-Plus 建築・地域計画工房様にご多大なるご協力を頂きました。記して謝意を表します。

参考文献

- 1) ジェイムズ・プロチャスカ(中村正和訳)、チェンジング・フォー・グッド、株式会社法研、(2005) pp.22-56
- 2) 宇佐市、JR柳ヶ浦駅周辺整備の取り組み、<https://www.city.usa.oita.jp/sougo/soshiki/14/toshikei/kaku/toshishisetuseibi/2580.html> (最終閲覧 2024. 10. 16)